

虹に 息子の言葉胸に花街道

②07 プロジェクト続け18年



富山市中心部の植樹升に
花の種をまく今井さん

県庁前公園には朝から約100人が集まっていた。6月上旬、富山市中心部の通りを花で彩る「花街道プロジェクト」が行われた。花の種が約15万粒用意され、周辺の会社の従業員や住民、高校生らがシャベルを手には歩道脇の植樹升に種をまいていく。

プロジェクトはNPO法人「花街道薬膳のまちを夢みる会」理事長の今井 壽子さん(83)＝富山市＝が始め、今年で18年目を迎えた。

きっかけは、今井さんの長男、力さんだった。「お母さんにこの言葉をあげるよ」と言って渡されたメモには「Merci le monde（メルシー・ル・モンド）」と記されていた。フランス語で「自然（地球）にありがとう」という意味。

語学に堪能な力さんが、みんなが幸せになれる言葉を考えたという。「『ありがとう』って言うと、幸せが広がっていくんだよ」と話し、照れくさそうに笑った。

力さんは、その1カ月後に41歳で帰らぬ人となった。今井さんは長男の残した言葉を考え続けた。「一人一人が自分の家や会社の前を花で彩れば、花街道がずっと延びていき、地球を一巡りすればいいな」。プロジェクトはたった1人で始まった。

◇

今井さんは富山市中心部で呉服屋を営む家の長女として生まれた。2歳の時に富山大空襲に遭い、焼け野原となった市街地の復興が進む中で育っていく。

性格は内向的で、「本の虫」。親戚や友達の家に行っても本棚の前に直行し、偉人伝などを読むような子どもだった。

中学3年生の時、父が交通事故で亡くなった。母子家庭となり、小学生の弟や妹が3人いた。「長女なのだから、しっかりしないといけない」と心に誓った。でも、どうしたらいいのか分からない。「せめて凜と胸を張って、笑顔で明るくあいさつをしよう」と決め、毎日鏡の前で笑顔の練習をした。

全日制の高校に進むのは難しいと思い、中学卒業後は銀行で働きながら、夜に定時制の雄峰高校に通った。生徒会や演劇部に入り、生花部を創設するなど活発な生徒に変わっていった。職場で出会った功さんと結婚して退職し、一男一女を育てた。

専業主婦になると「今井さんの奥さん」「力ちゃんのお母さん」などと呼ばれ、「自

分に名前がない」と感じた。父が生前に「職業婦人になりなさい」「世の中のためになることをしなさい」と言っていたことが、ずっと心にあった。社会参加し、ボランティアに取り組みたいと思うようになった。

44歳で富山駅近くのオフィス街のビル1階で喫茶店を開業した。資金もキャリアもない。ただ、コーヒーが好きなことが理由だった。店名は「そよ風」や「春風」を意味する「ゼフィール」で、長女の香桜里さんが名付けた。ボランティアに月10万円を充てられるような利益を目標に掲げた。

料理は得意ではなかったが、できるのは心を込めて作ることだけ。「おいしくなあれ」と念じながらコーヒーを入れ、料理を作った。喫茶店は客の回転率が重視されるが、客がほっとして長居できる空間を目指した。オープン当初は閑散としていたが、



「半夏生」 広田郁世

憩いの場を求める客が集まり、繁盛店となっていた。

◇

「富山はストロー現象で衰退していく」。喫茶店を始めて10年がたった頃、客から聞かされた言葉に今井さんはショックを受けた。北陸新幹線の整備が進められている頃で、開業すれば人口や産業が東京に吸い取られるという悲観的な予想があった。今井さんは「ビジネスの手法で地域の問題を解決できないだろうか」と考えるようになる。

当時、富山駅前周辺は空き店舗が目立ち、観光客や仕事帰りの人が富山湾の海の幸を味わえる場所は少なかった。「居酒屋通り」が必要だと考えた。

今井さんは1999年に会社を設立。駅前の市電通りに飲食店がテナントに入れる6階

建てのビルを購入し、居酒屋通りの呼び水にしようと考えた。当初はテナントが入らず、自ら飲食店やカルチャールームなどを経営した。いつしか周辺に飲食店が軒を連ねるようになった。

2002年、支えてくれていた夫の功さんが亡くなる。その5年後には長男の力さんが急性心不全で世を去った。

力さんは東京大を卒業して大手銀行で働いた後、地元銀行に勤務。亡くなったのは、富山に戻って3年がたった頃だった。

相次いで家族を失い、今井さんは心労で体調を崩した。生きるのが嫌になるほどだった。だが、長男の言葉をかみしめ、「花街道プロジェクト」を行うと決めた。

◇

プロジェクトの始まりは、富山駅から歩いて行ける距離にある千石町通りだった。

かつて富山と岐阜を結ぶ道が「ぶり街道」と呼ばれたように、通りを「花街道」にしていこうと考えた。

今井さんは通り沿いの店舗や住宅を一軒ずつ回り、「花と一緒に育てましょう」と呼びかけた。不審がられて、追い返されることもしばしば。だが、「怪しがられて当然」と考え、粘り強く訴え続けた。

市役所からプランターを借りることができ、花や土は今井さんが用意した。地元での理解が進み、有志が花を植えたプランター100鉢を通りに並べた。

さらに富山駅から南に伸びる通り1㌔の植樹升にマリーゴールドやキバナコスモスの種をまく取り組みも始めた。マリーゴールドは薬草の一種で、薬都をアピールする狙いもあった。城址公園には、今井さんが

所属する経済団体や市役所などとチューリップやムスカリ、スイセンを植えた。

プロジェクトには富山駅周辺開発協同組合も参加し、理事長を務めていた白倉三喜さん(72)らと活動の輪を広げていった。今井さんは、自助・互助・公助の三つが組み合わせる相乗効果の大きさを感じた。

市の担当者としてプロジェクトに携わった元建設部長の 帯刀 宏隆 さん(69)は、今井さんが朝早くから1人で植樹升の草むしりをしている姿をよく目にするという。「言わばなしでも、植えるだけでもなく、今井さん自らが行動しているから活動は続いていると思う」と話す。

◇

コロナ禍が始まる20年頃、今井さんは転倒した際に右手を骨折した。それから、体を動かさなくなった。筋肉が落ちて歩くのにも苦勞するほどで、言葉もなかなか出てこなくなった。

会社経営は香桜里さんに譲っていたが、「ボランティアは次の世代にちゃんと譲り渡せていない」と気持ちを入れ直した。猫背になっていた背筋を伸ばし、食事に気を配り、再びボランティア活動に精を出すようになった。「心を入れ替えるのは、人生で2回目」。父が亡くなり、胸を張って生きようと思った中学生の頃を思い出した。

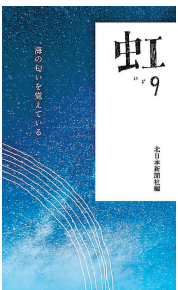
花街道をさらに呉羽丘陵へとつなぐ活動も始めた。呉羽青少年自然の家近くに有志と花壇を整備。美しい花を咲かせる薬草をフットパス（散策路）沿いに植える「薬草の花街道」作りも進め、一帯をウォーキングするイベントにも携わる。「里山の魅力が実感できる滞在型の観光県にしたい」と夢を膨らませる。

◇

現在、富山駅前の通りにキバナコスモスやマリーゴールドが芽吹いて葉を広げ、そよ風に揺れている。間もなく開花が始まり、盛夏には見頃を迎える予定だ。

駅周辺は近年、インバウンド（訪日客）の姿も目立つようになった。今井さんは言う。「富山の景色をきれいだと思ってもらえれば、世界にも花街道は広がると思う。夢みたいな妄想だけど」

道路脇に咲く花は風景に溶け込んでいて、普段はあまり気に留めていませんでした。今井さんの思いに触れ、花の種をまき、世話をしている人たちがいるから、街が彩られていると気づかされました。



「虹」第9集 販売中

「虹」を書籍化しています。最新刊の第9集『虹 海の匂いを覚えている』は2022年9月から24年5月までに掲載した20編を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352（平日午前9時～午後5時）。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50
北日本新聞社西部本社「虹」係
FAX 0766-25-7773
mail niji@kitanippon.jp
次回掲載は8月1日(土)です。

紙面提供／人と鉄のあいだに



OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作／北日本新聞社
メディアビジネス局